

# I 患者情報

## 1 総括及び全数把握対象疾患

- ・ 一類～五類感染症
- ・ 獣医師が届けを行う感染症

## 2 定点把握対象疾患

- ・ 週報・月報対象疾患「五類感染症」

## 3 鹿児島県の風しん予防対策

- ・ 鹿児島県の妊婦における抗体検査の調査事業

# 1 総括 及び

## 全数把握対象疾患

- (1) 一類感染症
- (2) 二類感染症
- (3) 三類感染症
- (4) 四類感染症
- (5) 五類感染症
- (6) 獣医師が届けを行う感染症の発生状況

---

## 総括及び全数把握対象疾患に関する動向

(2019年1月～12月)

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員長

鹿児島県医師会長

池田 琢哉

---

### 【トピックス】

#### ○インフルエンザ 222 万人 2種ウイルス同時拡大

厚生労働省は2月1日、1月21日～27日の1週間に報告されたインフルエンザ患者が1医療機関当たり57.09人だったと発表。昨冬ピークの54.33人を上回り、集計が始まった1999年以降最多となった。

#### ○混合ワクチン 未成年に無料実施

鹿児島市では、過去に予防接種を受けなかった7～19歳を対象に、麻疹・風疹混合ワクチンの無料接種を2019年度から3年間実施。また、子どもの頃に予防接種の機会がなかったため風疹の感染リスクが高いとされる39～56歳の男性約6万4千人に無料抗体検査を約3年間実施。

#### ○風疹患者 1,000 人越え 大流行の12～13年と類似

国立感染症研究所は、3月24日までの1週間に全国で新たに74人の風疹患者が報告され、今年に入り累計患者数が1,033人になったと発表。計1万5千人以上の患者が出た2012～13年の大流行と増加の仕方が類似しており、ワクチン接種を呼び掛けた。

#### ○薬剤耐性菌で年 8,000 人死亡 抗生物質使い過ぎ影響

抗生物質(抗菌薬)が効かない「薬剤耐性菌」によって2017年に国内で8千人以上が死亡したとの推計を、国立国際医療研究センター病院(東京)などの研究チームが5日まとめた。種類別では、MRSAの17年の推定死者数は4,224人で、11年から減少傾向が見られた。一方、耐性大腸菌は3,915人で右肩上がりとなっている。

#### ○マダニ感染症 最多 100 人

国立感染症研究所は、マダニが媒介する致死率の高い感染症、「重症熱性血小板減少症候群(SFTS)」の今年の感染者の報告者数が初めて100人に達したと発表。これまでは2017年の90人が最多であった。

### 【感染月齢】

1月 ○第3週に風しん患者が初めて報告。昨年、秋頃から首都圏を中心に風しんが流行。昨年度は、3例の報告があった。

○第2週にインフルエンザの定点当たり患者報告数が52.34となり、県内全域にインフルエンザ流行発生警報(基準値:定点当たり報告数30.0)が発令された。

- 2月** ○第1～9週までの百日咳の累計患者報告数が137件となり、昨年の報告数155件の約9割。年齢別では、10～14歳が50例、5～9歳が42例、20歳以上27例の順となった。
- 3月** ○第10週に咽頭結膜熱の患者報告数が59人（定点当たり報告数1.09）となり、全国及び本県の10年平均を上回り推移。例年、4～6月及び12月頃に増加傾向。  
○第11週に風しん患者2例目の報告。鹿児島市在住の20代（予防接種歴なし）の患者。  
○第13週にダニ媒介性疾患である日本紅斑熱とSFTS（重症熱性血小板減少症候群）の届出があった。
- 4月** ○第16週に感染性胃腸炎の患者報告数が増加、県内4保健所（鹿児島市、加世田、出水、鹿屋）で流行発生警報の基準値（20.0）を超えた。  
○第17週に県内で5年ぶりとなる麻しんの発生届があった。全数報告となった2008年には、全国の患者届出数は11,013例であったが、2006年に就学前の2回のワクチン接種が制度化され、2008年からは中学1年生と高校3年生相当の者を対象に5年間の補足的なワクチン接種も実施された。その後患者数は減少し、全国的に35～732例で推移。
- 5月** ○第20週に手足口病の定点当たりの報告数が10.54となり、流行発生警報開始基準値（5.00）を超えた。なお、第21週には、前週よりも161人増加し、統計を取り始めた2000年以降、最も報告数の多い週となった。
- 6月** ○第25週に7人の梅毒報告があり、昨年度を上回る状況で推移。県内の年代別では20代が40.7%、30代18.5%、40代11.1%、50代22.2%、60代以上が7.4%で、年々20代の若い世代に感染が広がっている。
- 7月** ○RSウイルス感染症の定点当たり報告数が0.91となった。近年では、夏頃より患者数の増加が始まり、秋（9月頃）にピークを迎える状況が続いている。県内では昨年の第36週に統計を取り始めた2004年以降で最も多い報告数を記録している。  
○第30週に急性脳炎の届出が3件あり、第1週から累計報告数が18件となった。なお、今年は届出のあった症例について、12件のウイルス検査を実施され、コクサッキーウイルスB3、ノロウイルスGⅡ.6、ライノウイルス等が検出され、特に6月からはヒトパレコウイルス3型が4件（すべて0歳児）検出された。
- 8月** ○第34週・35週にデング熱の報告があり、2例とも東南アジアから帰国後に発症。
- 9月** ○第36週にRSウイルス感染症の定点当たり報告数が5.41（292人）となり、同感染症の報告が開始された2004年以降、はじめて定点当たりの患者数報告数が5.00を超えた。  
○第36週に県内92カ所のインフルエンザ定点医療機関から67人（定点当たり0.73）の患者報告があり、3週連続の増加。また、第37週には、定点当たり1.04人となった。

なお、統計を取り始めた 1999 年以降、本県で第 37 週までに定点当たりの報告数が 1.00 を超えたのは、2009 年、2012 年のみ。

**10 月** ○梅毒及び後天性免疫不全症候群の報告が、昨年を上回るペースで増加。第 41 週現在で 43 例となり、統計を取り始めた 2006 年以降で最も多かった昨年の 51 例を上回るペースで増加。

○第 43 週に四種感染症であるチクングニア熱の患者(海外渡航歴あり)が報告された。全国で、第 42 週までに 42 例が報告されている。

**11 月** ○第 46 週につつが虫病の発生届出が 3 例あった。例年 11 月頃から患者の発生報告が増加。

○第 48 週に国内初となる B ウイルス病が報告された。罹患者の大部分はサルを取り扱う機会の多い研究者あるいはサル飼育施設の従業者となっている。

**12 月** ○第 50 週にインフルエンザ患者報告数が 15.76 人となり、流行発注意報基準値(定点当たり報告数 10.00)を超え、県内全域に流行発生注意報が発令された。

○第 51 週に咽頭結膜熱の報告数が 164 人(定点あたり 3.09 人)で、統計が開始された 1999 年以降最も多い報告数となった。

#### 【全数把握対象疾患の概要】

感染症発生動向調査は、全数把握対象 85 疾患および定点把握対象疾患 26 疾患について調査を行っている。

○一類感染症の届出はなかった。

○二類感染症の届出は、結核のみであった。届出数は 352 例で、前年(343 例)に比べ 9 例多い届出であった。病型は、無症状病原体保有者の 169 例が最も多く、肺結核は 117 例であった。年齢別では 80 代以上が 131 例で最も多く、70 代が 51 例、60 代が 47 例の順であった。

○三類感染症では、腸管出血性大腸菌感染症が 54 例で、前年(56 例)より 2 例減少した。月別では 6 月・11 月が 9 例、7 月 8 例、10 月が 7 例の順で、血清型別では O26 が 20 例で、O157 が 13 例、O103 が 5 例の順であった。年齢別では 1 歳が 11 例、30 代が 6 例、60 代が 5 例の順に多く、保健所別では鹿児島市が 20 例で最も多く、鹿屋 15 例、出水 6 例の順であった。

○四類感染症では、つつが虫病 66 例、日本紅斑熱 18 例、レジオネラ症 17 例、重症熱性血小板減少症候群(SFTS) 8 例、デング熱 3 例、B ウイルス病 2 例、A 型肝炎 2 例、レプトスピラ症 2 例、Q 熱、チクングニア熱がそれぞれ 1 例であった。つつが虫病は前年(89 例)より 23 例少ない。都道府県別では前年に引き続き全国 1 位であった。日本紅斑熱は前年(22 例)より 4 例少ない。都道府県別では、5 番目に多かった。重症熱性血小板減少症候群(SFTS)は、前年(9 例)より 1 例減少(男性 4 例、女性 4 例)。年齢別では、80 代以上(4 例)、60 代、70 代(それぞれ 2 例)の順に多かった。レジオネラ症は前年(8 例)より 9 例多い(男性 16 例、女性 1 例)。病型別では、ポンティアック型が 1 例、肺炎型が 16 例。デング熱は、

3年ぶりに発生届出が3例あり、10代男性1例、20代女性2例でいずれも東南アジア（マレーシア、ベトナム、カンボジア等）に渡航している。Bウイルスは、アジア初めてとなる報告が2例あり、2例とも県内の動物を扱う研究施設の職員で、国立感染研究所の検査で確認された。Q熱は、統計を取り始めた1999年から初めての報告となる届出があり、患者は畜産業の男性であった。チクングニア熱は県内初の届出があり、患者はフィリピンを旅行し発症。

- 五類感染症では、百日咳（728例）、梅毒（55例）、侵襲性肺炎球菌感染症（31例）、急性脳炎（29例）、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症（27例）、後天性免疫不全症候群（13例）、侵襲性インフルエンザ菌感染症（8例）、劇症型溶血性レンサ球菌感染症（7例）、アメーバ赤痢（6例）、破傷風、水痘（それぞれ5例）、ウイルス性肝炎（E型・A型を除く）、急性弛緩性麻痺、クロイツフェルト・ヤコブ病（それぞれ3例）、風しん、播種性クリプトコックス症（それぞれ2例）、バンコマイシン耐性腸球菌感染症、麻しん（それぞれ1例）の届出があった。

本感染症発生動向事業定点医療機関、並びに全数把握対象疾患のご報告をいただいた医療機関に感謝申し上げますとともに、今後も感染症の早期発見と早期治療に努めることで、地域への感染症防止に尽力していきたい。

## (1) 一類感染症の発生状況

発生報告なし

## (2) 二類感染症の発生状況

令和元年の県内における二類感染症の届出は、結核が352例(男性157例, 女性195例)で、平成30年の343例に比べ、9例多い届出であった(表1-1-1, 表1-1-2, 図1-1)。病型では、肺結核(116例), 無症状病原体保有者(169例), その他(67例)で、年齢別では、80歳以上(130例), 70歳代(51例), 60歳代(47例)の順に多い届出数であった。

表1-1-1 月別発生状況

月	報告数	無症状病原体保有者(再掲)
1	31	15
2	20	6
3	22	4
4	28	14
5	49	26
6	29	13
7	35	19
8	39	21
9	29	21
10	27	17
11	22	5
12	21	8
合計	352	169

表1-1-2 保健所別届出状況

保健所名	報告数	無症状病原体保有者(再掲)
鹿児島市	175	90
指宿	3	3
加世田	20	8
伊集院	0	0
川薩	35	15
出水	16	5
大口	33	29
始良	14	1
志布志	5	2
鹿屋	23	8
西之表	1	0
屋久島	1	0
名瀬	17	3
徳之島	9	5
合計	352	169

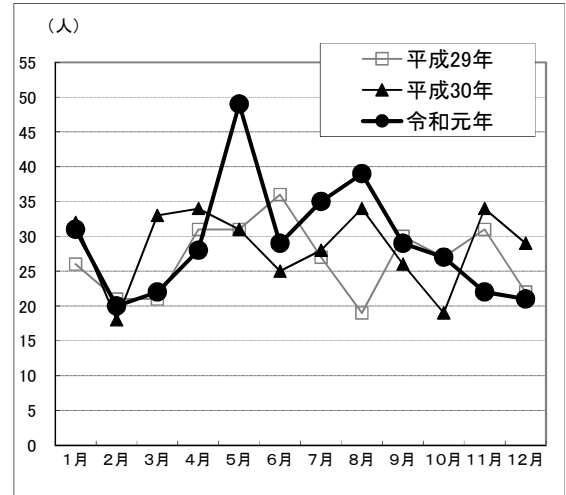


図1-1 平成29～令和元年の結核発生状況

## (3) 三類感染症の発生状況

令和元年の県内における三類感染症の発生状況は、腸管出血性大腸菌感染症54例(図1-2-1, 図1-2-2, 図1-2-3, 図1-2-4, 表1-2-1, 表1-2-2, 表1-2-3)であった。

### ○腸管出血性大腸菌感染症

県内における腸管出血性大腸菌感染症の届出状況は、前年(56例)より2例少ない54例(患者36例, 無症状病原体保有者18例)であった。月別では6月, 11月(9例), 7月(8例), 10月(7例)の順に(図1-2-1, 図1-2-3), 血清型別ではO26(20例), O157(13例), O103(5例)の順に多かった。(図1-2-2, 図1-2-4, 表1-2-1)。年齢別では, 1歳(11例), 30～39歳(6例), 60～69歳(5例)の順に多く(表1-2-2), 保健所別では, 鹿児島市(20例), 鹿屋(15例), 出水(6例)からの報告が多かった(表1-2-3)。

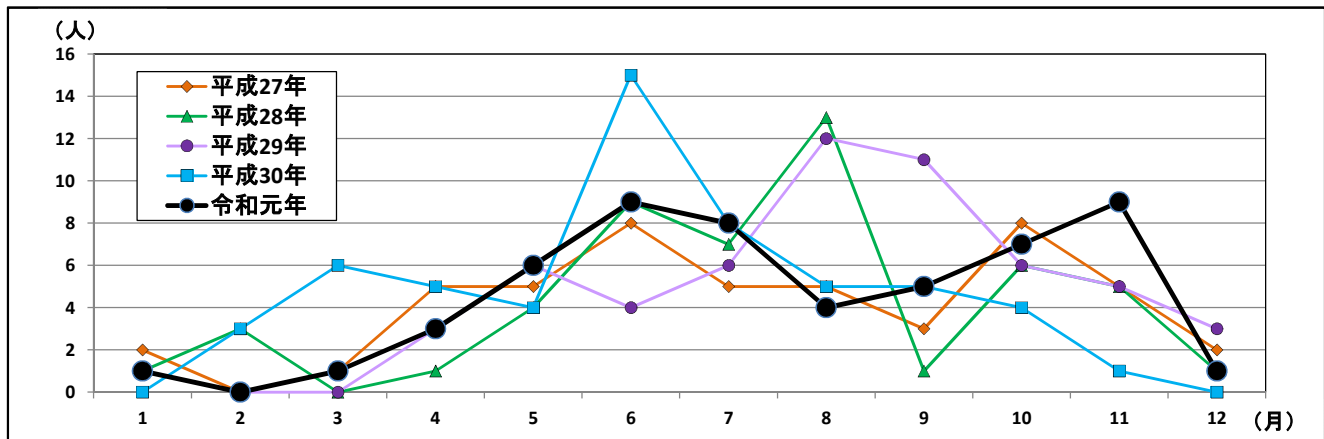


図1-2-1 腸管出血性大腸菌感染症の年別月別患者発生数

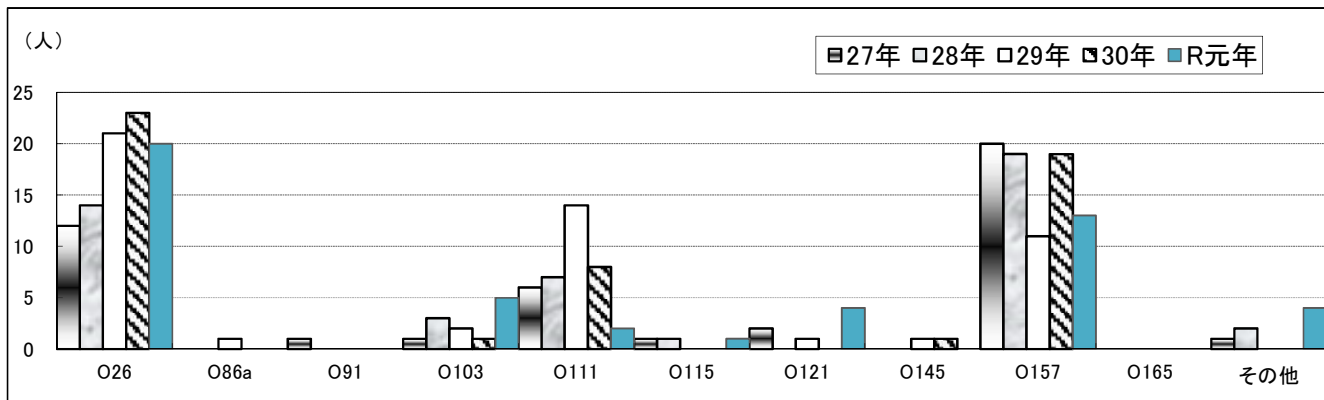


図1-2-2 腸管出血性大腸菌感染症の血清型別

表1-2-1 腸管出血性大腸菌感染症の年別血清型

年	型別	O26	O86a	O91	O103	O111	O115	O121	O145	O157	O165	その他	不明	合計
平成22年		13	0	1	3	13	0	8	0	26	1	2	0	67
平成23年		49	0	1	9	3	0	0	4	32	0	2	1	101
平成24年		12	0	2	2	61	0	2	1	30	1	4	2	117
平成25年		14	0	0	6	5	1	3	0	25	0	8	3	65
平成26年		25	0	0	3	9	0	2	1	18	3	4	3	68
平成27年		12	0	0	1	6	1	2	0	20	0	2	5	49
平成28年		14	0	0	3	7	1	0	0	19	0	2	5	51
平成29年		21	1	0	2	14	0	1	1	11	0	0	6	57
平成30年		23	0	0	1	8	0	0	1	19	0	0	4	56
令和元年		20	0	0	5	2	1	4	0	13	0	4	5	54
合計		203	1	4	35	128	4	22	8	213	5	28	34	685

表1-2-2 令和元年における腸管出血性大腸菌感染症の性別及び年齢別報告数

年齢別	～1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～14歳	15～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70歳以上	合計	
性別																			
男	5	1	1	1	2	0	1	0	0	0	0	2	3	3	1	3	0	23	
女	7	3	2	1	2	2	1	1	0	0	0	2	3	0	3	2	2	31	
合計	12	4	3	2	4	2	2	1	0	0	0	4	6	3	4	5	2	54	

表1-2-3 令和元年における腸管出血性大腸菌感染症の保健所別報告数

保健所	鹿児島市	指宿	加世田	伊集院	川薩	出水	大口	始良	志布志	鹿屋	西之表	屋久島	名瀬	徳之島	合計
報告数	20	1	2	3	3	6	0	0	1	15	1	0	1	1	54

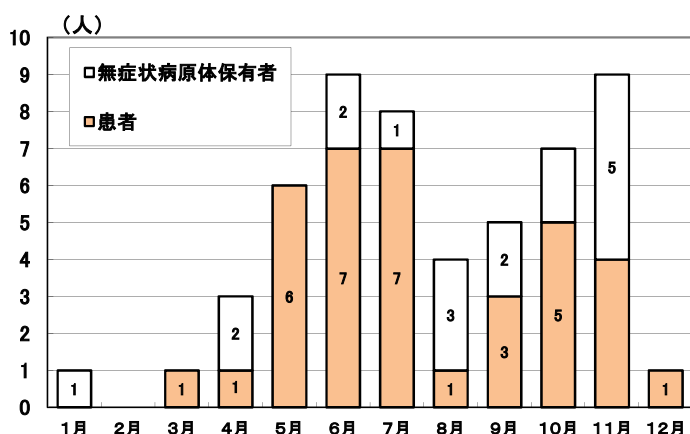


図1-2-3 令和元年における腸管出血性大腸菌感染症の月別・病型別報告数

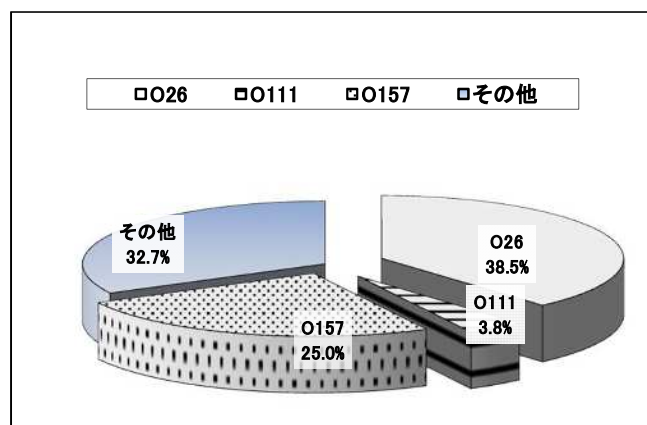


図1-2-4 令和元年における腸管出血性大腸菌感染症の血清型別割合



## (4) 四類感染症の発生状況

令和元年の県内における四類感染症は、つつが虫病(66例)、日本紅斑熱(18例)、レジオネラ症(17例)、重症熱性血小板減少症候群(8例)、デング熱(3例)、Bウイルス病(2例)、A型肝炎(2例)、レプトスピラ症(2例)、Q熱、チクングニア熱(それぞれ1例)であった(表1-3)。つつが虫病及び日本紅斑熱の年次別報告数推移を図1-3に示した。

表1-3 四類感染症の発生状況

疾患名	年										
	22	23	24	25	26	27	28	29	30	R元	
つつが虫病	53	73	48	38	41	67	77	66	89	66	
日本紅斑熱	11	9	17	14	14	11	22	18	22	18	
レジオネラ症	7	7	5	3	11	4	19	7	8	17	
重症熱性血小板減少症候群(SFTS)				5	4	6	4	11	9	8	
デング熱	0	1	1	5	0	1	2	0	0	3	
Bウイルス病	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
A型肝炎	13	4	2	1	34	1	1	1	1	2	
レプトスピラ症	0	1	3	3	0	1	5	1	0	2	
Q熱	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
チクングニア熱	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
E型肝炎	0	0	0	0	1	0	1	0	3	0	
ライム病	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
マラリア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	84	95	76	69	105	91	131	104	132	120	

### ○ つつが虫病

県内におけるつつが虫病の発生状況は、これまで最も多かった前年(89例)より23例少ない66例であった。都道府県別の報告数(398例)では、前年に引き続き全国第1位であった(2位千葉県46例、3位宮崎県43例)。性別では、男性、女性ともに33例で、月別では、12月(35例)、1月(15例)、11月(13例)の順に多かった。年齢別では、60歳代(24例)、70歳代(16例)、80歳以上(15例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿屋(18)、志布志(14例)、始良(13例)の順であった。

### ○ 日本紅斑熱

県内における日本紅斑熱の発生状況は、前年(22例)より4例少ない18例であった。都道府県別の報告数(318例)では、広島県(67例)、三重県(42例)、和歌山県(30例)の順に多く、本県は5番目に多かった。性別では、男性が7例、女性が11例で、月別では、7月、8月(それぞれ4例)、11月(3例)、5月、9月(それぞれ2例)の順に多かった。年齢別では、80歳以上(10例)、70歳代(4例)、60歳代(3例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿屋(11例)、志布志(4例)、始良、西之表、川薩(それぞれ1例)の順であった。

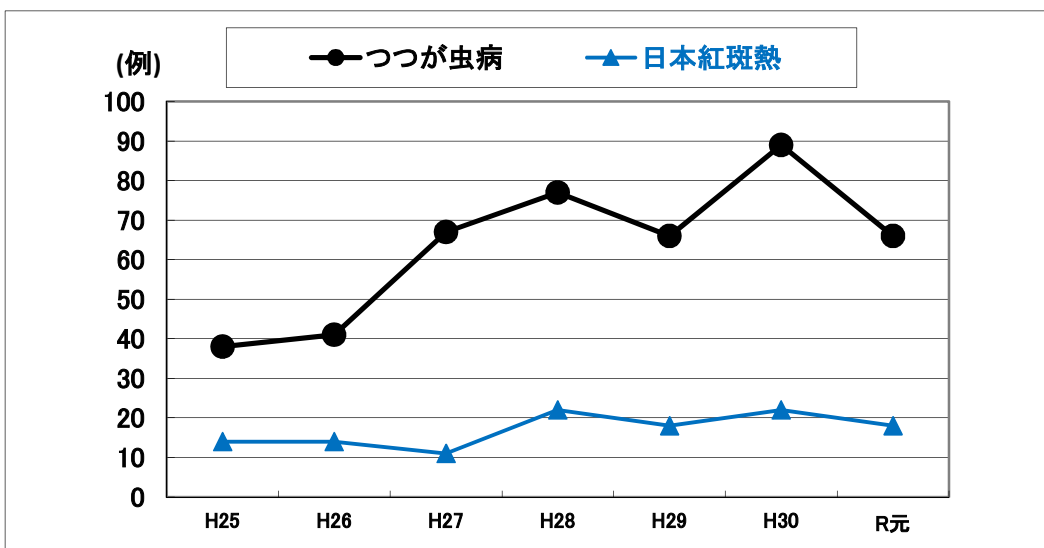


図1-3 つつが虫病及び日本紅斑熱の年別発生状況

## ○ 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)

県内における届出状況は、前年(9例)より1例少ない8例(男性4例, 女性4例)であった。月別では、6月, 7月, 10月(それぞれ2例), 3月, 4月(それぞれ1例)であった。年齢別では、80歳以上(4例), 60歳代, 70歳代(それぞれ2例)の順に多かった。全国では、101例の報告があり、山口県(11例), 徳島県, 高知県(それぞれ9例), 鹿児島県, 島根県, 長崎県, 宮崎県(それぞれ8例)の順に多かった。

## ○ レジオネラ症

県内における届出状況は、前年(8例)より9例多い17例(男性16例, 女性1例)であった。病型別では、ポンティアック型が1例, 肺炎型が16例であった。月別では、6月(3例), 2月, 3月, 5月, 8月, 9月(それぞれ2例), 7月, 10月, 11月, 12月(それぞれ1例)であった。年齢別では、50歳代, 80歳代以上(それぞれ5例), 70歳代(4例), 60歳代(2例), 30歳代(1例)の順に多かった。届出受理保健所別では、鹿児島市(7例), 出水, 大口(それぞれ3例), 川薩, 鹿屋, 名瀬, 徳之島(それぞれ1例)であった。感染経路は水系感染が2例, その他・不明が4例であった。

## ○ デング熱

県内では3年ぶりとなるデング熱患者の発生届出が3例あった。内訳は10歳代の男性1例と20歳代の女性2例で、いずれも東南アジア(マレーシア, ベトナム, カンボジア等)に渡航し帰国後に発症している。

届出受理保健所は、鹿児島市, 鹿屋, 名瀬から1例ずつであった。全国でも461例が報告されており、昨年(201例)の2倍以上に増加した。

## ○ Bウイルス

アジアでは初めてとなるBウイルスの患者発生報告が2例あった。2例とも県内の動物を扱う研究施設の職員で、国立感染症研究所の検査で確認された。2例目は初発患者報告後の遡り調査によって判明したものである。

## ○ Q熱

統計を取り始めた1999年からは県内で初めての報告となる患者の届出があった。患者は53歳の畜産業の男性であった。

## ○ チクングニア熱

10月に県内初となる届出があった。患者はフィリピンを5日間旅行し、帰国した翌日に発症している。他の蚊媒介性感染症も含めて東南アジアで大きな流行があったことから、全国の患者報告数も旅行者を中心に前年の4例から49例に増加している。

## (5) 五類感染症の発生状況

令和元年の県内における五類感染症の報告は929例で、百日咳(728例)、梅毒(55例)、侵襲性肺炎球菌感染症(31例)、急性脳炎(29例)、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症(27例)、後天性免疫不全症候群(13例)、侵襲性インフルエンザ菌感染症(8例)、劇症型溶血性レンサ球菌感染症(7例)、アメーバ赤痢(6例)、破傷風、水痘(それぞれ5例)、ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)、急性弛緩性麻痺、クロイツフェルト・ヤコブ病(それぞれ3例)、風しん、播種性クリプトコックス症(それぞれ2例)、バンコマイシン耐性腸球菌感染症、麻しん(それぞれ1例)の届出があった。(表1-4)。

表1-4 五類感染症の発生状況 (報告数順)

疾患名	年										R元
	22	23	24	25	26	27	28	29	30		
百日咳										153	728
梅毒	7	25	6	7	7	10	18	21	51	55	
侵襲性肺炎球菌感染症				12	24	25	17	24	33	31	
急性脳炎	11	4	8	0	7	11	17	21	26	29	
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症					1	13	15	10	25	27	
後天性免疫不全症候群	13	13	8	12	12	9	11	18	8	13	
侵襲性インフルエンザ菌感染症				1	4	0	2	1	8	8	
劇症型溶血性レンサ球菌感染症	0	0	3	2	1	6	3	3	3	7	
アメーバ赤痢	8	2	7	5	6	7	7	7	7	6	
破傷風	5	5	4	4	6	5	4	5	8	5	
水痘(入院例に限る)					4	4	3	5	3	5	
ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)	1	1	2	5	8	4	6	4	5	3	
急性弛緩性麻痺									3	3	
クロイツフェルト・ヤコブ病	5	3	3	4	4	10	4	6	3	3	
風しん	2	2	4	386	0	0	1	0	3	2	
播種性クリプトコックス症				0	0	1	1	5	1	2	
バンコマイシン耐性腸球菌感染症	3	1	1	0	0	1	1	0	0	1	
麻しん	4	3	1	0	5	0	0	0	0	1	
クリプトスポリジウム症	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	
侵襲性髄膜炎菌感染症				0	0	0	1	1	2	0	
薬剤耐性アシネトバクター感染症	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	
ジアルジア症	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	
合計	59	59	48	438	89	107	112	133	345	929	

### ○百日咳

百日咳は、全数把握対象疾患となった前年(153例)より574例多い728例の報告があった。

性別では男性が335例、女性が393例であった。

年齢別では、10～14歳(250例)、5～9歳(202例)、1～4歳(50例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(225例)、西之表(114例)、徳之島(71例)の順であった。

### ○梅毒

県内における届出状況は、届出数の多かった前年(51例)より4例多い55例(男性38例、女性17例)であった。病型別では、無症状病原体保有者(7例)、早期顕症Ⅰ期(25例)、早期顕症Ⅱ期(22例)、先天梅毒(1例)の順に、年齢別では20歳代(20例)、30歳代(12例)、50歳代(9例)、40歳代(8例)、70歳以上(3例)、0～9歳、10～19歳、60歳代(それぞれ1例)の順に多く、届出受理保健所としては、鹿児島市(38例)、川薩(7例)、始良(3例)、鹿屋(2例)、指宿、大口、名瀬(それぞれ1例)の順であった。

### ○侵襲性肺炎球菌感染症

県内における届出状況は、前年(33例)より2例少ない31例(男性18例、女性13例)であった。年齢別では70歳以上(12例)、0～9歳(10例)、50歳代、60歳代(それぞれ4例)、40歳代(1例)の順に多く、届出受理保健所としては鹿児島市(13例)、鹿屋(7例)、徳之島(4例)、指宿、始良(それぞれ2例)、伊集院、出水、川薩(それぞれ1例)の順であった。

## ○急性脳炎

県内における届出状況は、前年(26例)より3例多い29例(男性16例, 女性13例), 年齢別では, 9歳以下(24例), 10歳代(2例), 50歳代, 60歳代, 70歳以上(それぞれ1例)の順に多く, 届出受理保健所別では, 鹿児島市(23例), 川薩(2例), 伊集院, 鹿屋, 名瀬, 始良(それぞれ1例)の順であった。

## ○カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

県内における届出状況は、前年(25例)より2例多い27例で、性別では、男性(20例)、女性(7例)であった。年齢別では、70歳以上(21例)、50歳代(3例)、60歳代(2例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(23例)、鹿屋(4例)であった。

## ○後天性免疫不全症候群

県内における届出状況は、前年(8例)より5例多い13例で、病型別では無症状病原体保有者が8例、患者が5例であった。性別は13例とも男性で、年齢別では、30歳代(6例)、20歳代(3例)、60歳代(2例)、40歳代, 50歳代(それぞれ1例)の順に多く、届出受理保健所としては、鹿児島市(12例)、鹿屋(1例)の順であった。

## ○侵襲性インフルエンザ菌感染症

県内における届出状況は、前年と同じ8例(男性1例, 女性7例)であった。  
年齢別では、9歳以下(1例)、80歳以上(7例)、届出受理保健所別では、鹿児島市(5例)、志布志, 鹿屋, 徳之島(それぞれ1例)であった。

## ○破傷風

県内における届出状況は、前年(8例)より3例少ない5例(男性2例, 女性3例)で、年齢別では60歳代(2例)、80歳以上(2例)、10歳代(1例)の順であった。届出受理保健所別では、鹿屋, 名瀬(2例づつ)、川薩1例であった。

## ○風しん

県内では鹿児島市保健所から10歳代と20歳代が一人づつ(2例)の報告があった。  
全国では2018年に首都圏を中心に風しんの流行(報告数2917例)が始まり、本年も引き続き2306例の患者報告があった。遺伝子型は2例とも全国で検出されているE1型であった。

## ○麻疹

県内では5年ぶりとなる届出が1例(20歳代の男性)あった。  
台湾から帰国後、2週間ほどで発症している。  
2019年は全国の報告数も744例で前年の282例から増加している。

## (6) 獣医師が届けを行う感染症の発生状況

県内において獣医師が届けを行う感染症の報告例はなかった。